

The Reminiscence of Exellia NG+1

「『 』に還る冒険者」

キャラクター作成レギュレーション

基本概要

- ・ 経験値：3000 点（初期作成に準ずる）
- ・ 資金：1200G（武器・防具代は除外する）
- ・ 名誉点：500 点
- ・ 成長回数：0 回

各種制限について

- ・ ヴァグランツ禁止
- ・ 蛮族 PC 禁止
- ・ ソード・ワールド 2.0 / 2.5 標準流派への入門、及び秘伝の習得・使用の禁止
- ・ 武器防具強化禁止
- ・ 《武器習熟 A / 盾》《防具習熟 S / 盾》の削除、及び装備可能ジョブの制限
- ・ ジョブ別の習得技能制限

詳細は以下のリンクを参照

<https://strayed.site/ytsheet2/sw2.5trex-ng1/?id=hB4Xoe>

導入 ～時代の終焉～

その当時、君達「かもしれない存在」は最後のアーセナルバード「ジャスティス」を撃墜すべく、行動していた。

しかし、唐突に現れた、「ヴァルマーレの鬼札」が牙を剥いた。

不動遊星

「集いし絆の煌めきが、新たな未来を描き出す！光さす道となれ！リミットオーバー・アクセルシンクロオオオ！希望の光、コズミック・クェーサー・ドラゴン！」

宙準星の竜…それが持つ「あらゆる力を無へと還す権能」により、君達はあらゆる能力を封じられ、あらゆる技能を、経験をも封じられ、その隙を突いてのアーセナルバードからの核弾頭発射により、君達は終わりを迎えた。

割って入った、エクセリアの『機転』がなければ。

アーセナルバードを撃墜するも、目の前にはコズミック・キューサー・ドラゴンを後ろに据えた不動遊星がいる。

エクセリアは、そのコズミック・キューサー・ドラゴンを『封印』するための布石を打っていた。

アイテール各地に置かれた『碑石』。そこから封印の『剣』を展開し、遊星のコズミック・キューサー・ドラゴンに突き刺したのだ。

封印は、無事に成功する…かに思われた。

弾き飛ばされる『剣』。天を照らす黄金色の焰。

霊極性エーテルを帯びたその焰は、万物に終焉を齎すに相応しい力があつた。

そして彼女は、己ごと、『なりそこないの英雄』である君達だったものを『10年前の時間軸に相当する並行世界』へと飛ばし、『ヴァルマーレと戦争を開始する前の世界』へと向かおうとした。

(※GM メモ：エクセリアの独白ここから)

何度繰り返したことだろう。

別の結末を描き出すため、何度も周回を繰り返した。

そして、私はある結論に至る。

彼らを、正しい方向に導かなければ、新たな未来には至れない、と。

だからこそ、私は…今回の周回の彼らを試す。

すべては、その絆の煌めきが、新たな未来を描き出すために。

(※GM メモ：エクセリアの独白ここまで)

?????

「…さん。…なあ、お前さん」

君達は、フレイディアへ向かう馬車の中で目を覚ました。

(※GM メモ：各フレーズ RP 待機)

気さくな同乗者

「魔されていたようだが、大丈夫か？」

「ひどい汗だ。エーテルにでも酔ったかい？都市周辺は魔晶石を用いた防御機構が多いからな。その影響で、たまにあるんだよ。お前さんのように、エーテル酔いするやつが」
「なぁに、すぐに慣れるさ」

そう言って、気さくな同乗者は酒を飲み始める。

その瞬間…、君達は、「聞き覚えのある」竜の咆哮を聞くだろう。しかし気さくな同乗者は気付いていないようだ。

権天隊の隊士

「その馬車、止まれッ！」

気さくな同乗者

「…ん？なんだ！？」

唐突に馬車が止められる。

君達は危険感知判定を行わなければならない。

危険感知判定 目標値：7

成功時、ロールプレイで「気さくな同乗者」の動きを抑制するロールプレイを行うことができる。

矢が馬車の床に突き刺さり、気さくな同乗者は悲鳴を上げる。

馬車の御者

「いったい、何の騒ぎです！？」

権天隊の隊士

「ケンケル族の斥候部隊と戦闘中だ！じきに、この街道も戦になるぞ！…ッ！？」

兵士の発言と並行する形で、トカゲとヒトを掛け合わせたような外見の獣人が現れる。

権天隊の隊士

「もう、こんなところに！？ケンケル族は、我々フレイディアの権天隊が食い止める！
お前達は行け！」

権天隊の防衛のもと、君達はフレイディアに辿り着く。

気さくな同乗者

「ふう…。まったくツイてないぜ。しかし、流石冒険者だ。バルバロスの襲撃に動揺しないなんて！お前さんも、いずれ奴等『ケンケル族』と殺り合うことになるかもしれない。そんな時は、気を付けるんだぜ。

「そういや、お前さんがた。フレイディアは初めてかい？」

君達はフレイディアについて思い出そうとするも、まるで『前の周回』の記憶にモヤがかかっているかのように、思い出すことができなかった。

気さくな同乗者

「その様子だと、初めてのようだな。それなら、旅慣れたこの俺が、ひとつ解説してやろうじゃないか。

フレイディアはときに『竜の都』『山の都』と言われる国家でな。竜とヒトが共存関係にある、山岳地帯に作られた城塞都市さ。今のところ、特に困ったことにはなっていないが…、龍姫公の対ヴァルマーレ政策に反発する連中も多くいる。何より、ケンケル族の侵入も増えてきているらしい…。さっきのようにな」

「おっと、そろそろ到着のようだぞ。見ろ、あれが竜と人が古より友誼を結び、神雨に祝福された都…フレイディアだ！」

竜の都フレイディアで

君達は冒険者ギルド「暗魂の暁」に入ると、フレイディアの店（マーケット）などで武器を買った。

そして己の動き方をある程度把握して、「暗魂の暁」に戻ってきたところで、話が動き出す。ギルドマスターのエメリーヌが、誰かを待っているようだった。

エメリーヌ

「…流石に遅いわね…。ルーキー、君達の力を貸してほしいな。

舞術師ギルドに行ったであろう、エクセリアを探して欲しいんだ。

流石に、最初の依頼だから、報酬はそこまで高くはできない。だけど、冒険者たる者、人探しぐらいはしてくれないとね」

(※GM メモ：RP 待機)

舞術師ギルドは、エーテライト・プラザから東にのびる「スターダスト・アベニュー」の付近にある。

舞術師ギルド前にて

君達は舞術師ギルド前に行った。

そこで、君達はごろつき複数名と、どこか懐かしい外見の少女が戦っていた。

ごろつき

「流石に複数人でかかれば、幾ら手練れだろうと体力に限界が来るだろ！」

エクセリア

「そう断定するのは早急じゃないかな？私の体力はまだ有り余っているぞ？」

少女の煽りに激昂したごろつき達が、剣やら斧やら槍やら…ありとあらゆる方法で攻撃をした。しかし、それをあるときは『受け』、あるときは『躲す』ことで、上手い具合に捌いていた。

そして極めつけは…片方の剣に『炎』を、もう片方の剣に『闇』を纏わせ敵を斬っていくという特徴的な剣技に、一度に最大 5 回まで切り裂く瞬間的な剣戟。

その切っ先は鉄を斬るかの如く。

ごろつき

「な、何だコイツ…。本当に無尽蔵に力を溜め込んでたのかよ！？」

エクセリア

「どうする？」

ごろつき

「クッソ、ずらかるぞ」

そう言って、ごろつき達は逃げていった。

エクセリア

「…さて、と。こいつらを退けたのはいいが…、こうも目立つか？この姿は。

つっても、見た目を偽装する魔法なんて覚えてねえし、千変万化の衣も、翼やら皮膚が変化した硬い鱗とかで、袖を通せねえしなあ…」

(※GM メモ：RP 待機)

エクセリア

「…君達は…？」

(※GM メモ：RP 待機)

エクセリア

「…なるほど。『前の周回』の私は失敗した、というわけか。

それにしあって、ヘルメスは落ちぶれたな。…アゼムは原点回帰した、といったところのようだが」

「しかし…、私の事をなんだと思っているんだエメリーヌは…。

確かに、君達と比較すれば『老木』だろうが、私達の視座で言えばまだ『新芽』もいいところなんだ。あんなごろつき程度だったらあしらえる」

まあ、アイツのことだし、とエクセリアが言っている傍から、またしてもごろつきが現れる。

ごろつき

「おい、その冒険者。お前達は、ソイツを見てどう思うんだよ。俺達にとっては目の上の瘤なんだ」

(※GM メモ：RP 待機)

PC への選択肢

- ・お前達が考えるような存在じゃない
- ・ごろつき相手なら容赦はしない

ごろつき

「ケッ、こいつらやる気だ。おい、お前等！こいつらにフレイディアの格差社会を教えてやれ！」

敵：ごろつき×3（剣術士、槍術士、格闘士：それぞれ1名）

君達はごろつきを成敗した。

ごろつき

「クソッ、何なんだコイツ！一旦ずらかるぞ！」

ごろつき達は逃げていく。

エクセリア

「はぁ。この国の治安も壊れてるな…。

この国の太守にして、龍姫の公…。あいつがあまり表舞台に出てこなくなってから、3年は経つか…」

「さて。ちゃんと時間軸的には私は識っているんだ。君達の、その魂が元々いた場所において起こったことをね。

君達は…ヴァルマーレが保有する『切り札』によって殺されたんだろう？」

(※GM メモ：RP 待機)

エクセリア

「あいつを呼ぶときの二つ名は幾つもある。ヴァルマーレの英雄、サテライトのクズ野郎…。そいつにフルボッコにされて、仕方なく私が術式を使用した、としか思えない。

その過程で、逃がすことができたのが、『君達の魂』と『私とその世界で保有していた記憶』だったのだろうよ」

「でなければ、こんな意味深な未来を視るはずがない。そして、その未来に至る原因を、記憶として渡すはずがない」

(※GM メモ：RP 待機)

その瞬間、君達は突如として目眩に苦しめられる。

過去視で見た『未来』

(※GM メモ：BGM「Answers」)

君達は、目眩の中で何か不思議なものを見る。

その中に、エクセリアがいた。そして、エクセリア以外にも、何人かの冒険者がいた。
海では、2つの国の艦隊が決戦をしていた。
そして、冒険者達は、空を征く巨鳥がいた。
そこへ駆けつけるように。

不動遊星

「集いし絆の煌めきが、新たな未来を描き出す。光さす道となれ！リミットオーバー・アクセルシンクロオオ！！希望の光、コズミック・キューサー・ドラゴン！」

巨鳥を守るように、馬鹿でかい竜が大量に現れる。
そして、あらゆる力という力を無効化された。

それから始まったのは、不動遊星が駆るカード達…。シューティング・キューサー・ドラゴン、コズミック・ブレイザー・ドラゴン、聖珖神竜スターダスト・シフル、コズミック・キューサー・ドラゴン、シューティング・セイヴァー・スター・ドラゴンによる蹂躞だった。

エクセリアは限界を悟り、己が権能、魂を手繰る力を以て、あらゆる情報を漂白した魂資源を「10年前の過去」へと飛ばしたのだ。そこに、彼女自身の記憶をも添付して。

そして、その世界に残った彼女は、目の前に現れた『英雄』に対し、一手を打つ。

嘗て、神々の戦争の時代において、人々の信仰を集めるために作られた『碑石』。そこから莫大な魔力を引き出し、コズミック・キューサー・ドラゴンを封じるための『剣』を創造した。

無論、あらゆる妨害を打ってくることは想像に難くない。だからこそ、彼女は先んじて『最果ての聖王』としての権能を発動し、すべてのシンクロモンスターの権能を封じた。

———だけではない。シューティング・セイヴァー・スター・ドラゴンの妨害に合わせて、己の身を破碎する力を使った。

エクセリア

「託すべきものは託した。あとは、過去で記憶を受け取った私の役割だ。さようなら、冒険者。さあ、一世一代の大博打だぞ…！」

コズミック・キューサー・ドラゴンが咆哮を上げる。

その直後、『剣』が封印魔法を発動し、コズミック・キューサー・ドラゴンを月よりも向こうの宙域へと遠ざけていく。

そして、渡した記憶の、その最後。

エクセリアはこう追懐した。

——世界から瞬く間に命が流れ去り、澱むことなく、まだ見ぬ方へと進んでいく。

——英雄などない世界で。

——この一瞬ごと、生まれ、死んで、答を得る。

…景色は飛んで、世界線が変動した後のフレイディア。

種の限界を超え、姿さえも変貌していた彼女は、「終わってしまった未来」から記憶を受け取る。

エクセリア

「…なるほど。リーンが月光剣を持っていたのはそれが原因か。

だったら、咎める理由は殆どないな。そして、彼女に宿った氷神の力の制御方法も、そこから解決することができそうだな」

最後の薪の王の直感

目眩が治ると、エクセリアが何か考えていたようだった。

エクセリア

「気がついたか？唐突に苦しそうにしたもんだから、まさかとは思っていたが…。もしかしなくても、『過去』を見ていたのではないか？」

(※GM メモ：RP 待機)

エクセリア

「…どうやら、『前の周回』の私は、君達を「魂だけ」飛ばして、因果を増幅させないように仕組んだようだな。

一旦、ギルドに戻るか。話さなければならないことがある」

彼女はギルドでの帰路で、『あること』に気付く。

それは、彼らが己のことを初対面だと考えていたことだ。

その症状は、記憶の中で会ったアーテリスの英雄から聞いた——

エクセリア

（いや…。今は、邪推することはしない。今は彼らが進む道を、見届けるとしよう）

幻影の魔星

君達はギルドマスターからの依頼をこなしたことで、700 ガメルをもらった。

エメリーヌ

「…さて…。実のところ、この国は問題を抱えてる。それを炙り出すため、エクセリアが各国を駆け巡ってる状態だね。ヘタにしくじられても困るから、こうしてルーキーに使いっ走り頼むことが多いんだ。

今度の依頼は、ここ龍刻から近い島国、ヴァルマーレへの訪問なんだ。そこで不穏な動きがあるって聞いているから、エクセリアには『行くな』って言っているんだけど…」

（※GM メモ：RP 待機）

エメリーヌ

「…そう。意固地になって行こうとしてる。ただ、確かにあそこには、集団で行かせるべきではない、とは考えてるよ。でも…それ以上に、手練れである彼女を失う方が良くないんだ。彼女は『リーンという後釜がいる』って言っているけど、彼女の腕前は…」

そうギルドマスターが考えているところで、ギルドの扉が開く。

懐かしい雰囲気の少女の声

「ただいまー…って、あれ？あなた達は…？」

そこにいたのは、猪と思われる魔物を 5 匹、既に品質が落ちないように処理したと思われる傷痕がついたものを担いでいた…だいたい 17 歳程度の少女だった。

エメリーヌ

「あら、リーン。お帰りなさい。…それで、依頼というか、お使いで頼んだとはいえ…、本当に猪を持ってきたのね」

リーン

「山に入れば猪がいっぱいいるじゃないですか。

…そこで、やけに猛っていた個体を 5 体仕留めたというわけです。

彼らは？」

エメリーヌ

「新米冒険者よ。…紹介するわ。彼女はリーン・ウォータース。先天的に『光に偏った存在を探り、光の偏向状態を操る』異能を持つ冒険者よ。

そして…エクセリアが、己の後釜、…すなわち後継者として推している人物」

君達は、彼女の異様な姿に顔をしかめるかもしれない。

首から下、露出した部分は青みがかり、人間のそれから少しばかり逸脱した姿。それを抜きにしても、両肩や両膝、背中にくっついたゴテゴテしたものを無視すれば、「氷の女王様」とでも言うべき風体。

そして何より、ゴテゴテした機械のようなパーツ、そのうち肩から排出される青緑色の光が、莫大な魔力を放出していることが分かった。

——その莫大な魔力を以て、己の状態を保持してるのも含めて、何となく予想できたのだ。

リーン

「…あなた達は、どこかで会ったりしませんでしたか？たとえば…、そう、ヴァルマーレと龍刻の係争地帯で、巨鳥を守るように現れた『英雄』に殺された、とか」

「…その事実を、5 年前に思い出しました。それで、エクセリアさんに聞いたんです。

『あのとき、なにがあったんですか』と。辿り着いた真実が、この姿。私が、疎まれるような力を使って、当時の皆さんを支援していた、という事実でした」

(※GM メモ：RP 待機)

リーン

「分からないかもしれませんが…、私も、真実を受け入れるのに 1 ヶ月はかかりました。

何せ龍刻は、蛮神討滅を是としているのですから。

己が蛮神になっていた、と言われて、それを素直に受け入れることは、容易い話ではないはずですから」

君達は、冒険者レベル+知力ボーナスで判定を行わなければならない。

冒険者+知力判定 目標値：10

成功時、彼女が今も尚降ろしている『蛮神』が分かる。

※「氷神シヴァ」と「シューティング・セイヴァー・スター・ドラゴン」の複合であると分かる。また、「シューティング・セイヴァー・スター・ドラゴン」が「氷神シヴァ」の力を制御するための安定装置となっていることも薄々分かるようになる。

リーン

「…思い出したのが5年前。それまで、私がそんな力を持っているなんて思ってもいなかった…。というより、気付いてすらいなかったんです」

エクセリア

「…それに気付くきっかけを与えたのが、『前の周回』の私だった、というわけだ」

そこへ、エクセリアが現れる。

エクセリア

「リーンの魂と記憶…その殆どを、『この時間軸』の、『5年前の少女リーン』に飛ばすことで、無理矢理時間軸を繋いだ、というわけだ。流石に、プライベートな部分に踏み込んでまで記憶を継承させることはできなかったけどね」

その発言を聞いたエメリーヌは、困惑したようにエクセリアを見る。

エメリーヌ

「それじゃあ、まるで…、リーン『だけ』を生かすために、あなたは『肉体と魂』を、彼らは『肉体と記憶』を失った、と捉えることもできるじゃないですか…」

エクセリアは黙った。ぐうの音も出ないのか、あるいは反論することさえも憚られると考えたのか。

エクセリア

「…面倒事は後だ。私は、今からヴァルマーレの陸軍大臣、蘆田正規に話をつけに行く。

エメリーヌ、その新米に依頼を回してやってくれ」

そう言って、足早にギルドを立ち去る。

その後、エメリーヌが愚痴をこぼす。

エメリーヌ

「…確かに、あなたは冒険者でありながら外交さえも任されるような重役なのは分かっているけど。幾らあなたが『幾万年も生き続けた不死』だからといって、己の命を軽く見過ぎてはいないかしら」

この言葉から、いくつかのヒントを得ることができる。
後々思い出すことになるだろう。

- ・ 外交さえも任されるような重役
- ・ 幾万年も生き続けた不死
- ・ エメリーヌの考えとの違い

エメリーヌ

「ともかく、君達に依頼することはあるのも事実だ。話をしよう。

依頼の内容としては、『幻影の魔星』という噂に関する調査と、原因究明だ。

悪いけど、君達の実力を測るためのものさ。前金なし、支給品なし、己の実力だけで超えて行かなければならないのさ」

街での聞き込み

君達はマーケットで情報を聞き込むことになる。

冒険者+知力判定 目標値：9

成功時情報開示

市民

「そういえば、『幻影の魔星』についてはどうなったのかしら」

「さあ、分からないわ。少なくとも、討伐はされていないようね」

「暗魂の暁が手を出そうとしていることは分かるんだが、それ以上はわからねえな」

特に重要そうな情報はなさそうだ。

そのとき、男たちの悲鳴が聞こえる。

もしかしたら、そこに手がかりがあるのかもしれない。

剣術士ギルド前にて

君達が、声が聞こえた方角を参考に行くと、そこは剣術士ギルド前だった。
そこに、『ソイツ』はいた。

????

「この程度が、この世界の力か。我が魔星の力の前では、さほど強くないと見える」
「ひれ伏せ、この世界の先住民！我らの力の前に！」

敵：“幻影の魔星”アンドレア

君達はアンドレアを打ち倒した。
そこへ、リーンが駆けつけてくる。

リーン

「大丈夫！？」

(※GM メモ：RP 待機)

リーン

「…エクセリアさんが、ヴァルマーレに行く理由ってというのはね。今、君達が打ち倒した、『祝福無き者』に対抗するための戦力を確保して、その上で龍姫公をこの国の玉座から蹴り落とすための索を練るためなんです。
少し、聞いた話があるので話しておきますね」

そう言って、彼女は己の力について、噛み砕いて説明した。

両肩と背中、両膝の機械的なパーツは、すべて『疑似氷神シヴァ』を制御するための安定装置である、ということ。これが、人々に公開されている「リーン・ウォーターズの持っている専用武器」の表向きの側面。

しかし、実際には違う。

両肩部バインダーには、カルディアの欠片たるマナ以上に強力な力で、マナを含む、ほぼすべての力の根源である「エーテル」を、最終的に、大量に取り出すことのできる「GNドライブ」を2基、同調させて搭載し、その「エーテル」で『疑似氷神シヴァ』の顕現を維持したり、魔力を補填したりすることができているという。

リーン

「これは、私の勝手な推測なんですけど…。彼らの目的は、この世界の『始まりの剣の力』を、この世界の住民から篡奪することなんじゃないでしょうか？最近植物学を学んでいるぐらいなので、知識は皆無なんですけど…」

そう言って、彼女は君達を冒険者ギルドまで連れていく。

君達を送った後、国際取引所でリーンはひとり呟いた。

——彼らの中に、『前の周回』で致命的な傷を世界につけたのではないかと。

報酬

経験点

- ・ 基本：1000 点
- ・ アンドレア撃破：500 点

資金

- ・ エクセリア搜索：700G
- ・ 幻影の魔星：600G

名誉点

本シナリオに名誉点報酬は存在しません。

成長回数

- ・ 基本：2 回